

。ときめきリーフノベル

無口な女房

文・高安義郎 絵・芝 章一



我が家の女房はとにかく無口で、特別な用でもなければ一日話さないことがある。私もどちらかというとき余計な事は話さない方だが、私は正確に言葉を選ぶ癖があり、それでつい口数が減るだけなのだ。だが女房はこれと言った理由はないらしく、友達が来ても専ら聞き役に回っている。

ある時、

「あまり話さないのはどうしてだ」と聞いたことがあった。すると女房は、

「話さなくたって」と言うのだ。

「じゃ俺に何かあっても黙ってるのか？」と聞くと、

「分かっているから」

とだけ言って後は何も言わなかった。

我が家の音と言えば女房の足音とテレビの音。そして時折道路路に向かって吠える座敷犬の柴犬ゴンの声くらいのものだ。

そんなある日、遠くに嫁いだ娘の産後の肥立ちが悪く、しばらく赤ちゃん

の面倒を見てくれと言われ、女房は家を留守にすることになった。

静かな我が家はいつそう静かになった。ゴンの餌係は必然的に私になった。ゴンは変わり身が早くすぐに私になれなくなり、夜などは枕元にすり寄ってくる。犬がこんなに可愛いとは思わなかった。口が利けたらもっと可愛いだろうな、などと思った。

妻がいなくなつて一週間もすると、人の気配のないことが寂しくなってきた。ラジオをつけても一方的に音が流れる。テレビをつければ埒もなしの勝手なおしゃべりが馬鹿馬鹿しい。車に乗ればベルトを閉めろという電子音がするくらいで、空しさは余計に募るよう思えた。寂しくなり女房に電話をしたが、

「今ミルク」

「今おむつ」とだけ言ってほとんど話相手をしてくれない。せめて犬が俺の言葉に返答してくれないものかとそんな

事を思ったりした。

寂しさをつくづく感じ始めたある日、書き物の途中で空腹と眠気を感じ、ゴンを車に乗せ近くのスーパーに買い物に行った。犬に話しかけながら車を走らせると、シートベルトの閉め忘れを知らせる発信音がした。

「近くだからいいんだよ、なあゴン」ゴんに話しかけた。すると、

「そうはいきません。規則ですから」そう車が言うのだ。

「うるさい。少しは融通利かせろ」と言うのと、

「あなたは学校の先生なのに、規則に従わないんですか」

と言う。何故かむっとした私は、

「誰にも迷惑かけてないだろ。もう着くからいいんだ」

ぶつきらぼうに言うのと、

「では警察に通報します」と言う。

「勝手にしろ」そう言ってやった。

買い物済ませて駐車場に戻ると、

警官が一人車の脇に立っていた。

「何か？」と聞くと、

「今車から連絡がありました、あなたがシートベルトをしていなかったと言うのですが、認めますか」

と言う。私は、

「何かの間違いでしょう」

そう言つてとぼけた。すると車は、

「間違いないやありません。忠告を無視したんです」と言う。

「困りましたねえ、これじゃ水掛け論に

なりますから誰か証人はいませんか」警官は車の中を覗き込みながら言った。すると、

「証人ならいます。助手席にいるゴんに聞いて下さい」車が言う。

するとゴンは一声吠えてから、

「この人ベルトをしていなかったよ。僕のご飯も忘れることがあるんだ。この前は家の鍵を忘れて。忘れん坊なんだこの人」

犬が喋ったことより、違反を暴露された事の方がショックだった。

「では違反が立証されたので減点となります」警官が言った。

「飼われている恩も忘れやがって。済んだ事や関係ねえ事まで。このお喋りの馬鹿犬め。沈黙は金、お喋りは鉄さびだぞ」小声で言うのと、

「そうよゴン、すんだ事や余計な事を話さないのが愛情なのよ」

どこからか聞こえてきた妻の声には私は目を覚ました。

私は机に寄りかかり居眠りをしていたのだった。

なるほど妻の無口はまさに金なのだとか今更ながら思えてきた。その時電話がかかってきた。女房からだった。

「明日帰れます」それだけ言ってきた。私も余計な事は言わず、

「わかった」とだけ言った。

それだけなのに、娘が元気になったらしいことや赤んぼうの順調さなど、こまごまと伝わってきたのが不思議だった。